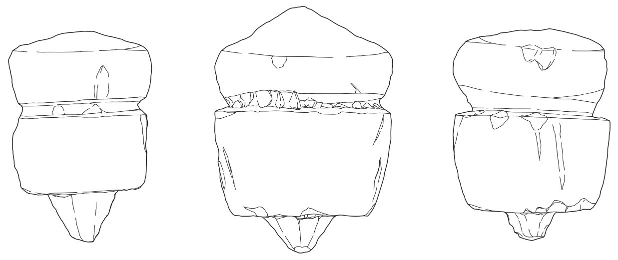
大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第147集

猪野遺跡3

第7次調査

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



2017

大分市教育委員会

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第147集
猪野遺跡3　第7次調査
二〇一七　大分市教育委員会

序　　文

本報告書は、大分市大字猪野字法光寺において平成 28 年度に宅地造成工事に伴いおこなった猪野遺跡第 7 次発掘調査の成果を収録したものです。

猪野遺跡は、大野川の左岸に南北方向に広がる鶴崎台地上に位置しています。これまでに６回の調査が実施されており、弥生時代から中世までの長い期間に渡たる時代の遺跡が見つかっています。

今回報告いたします猪野遺跡第７次調査では、弥生時代と古代、中世の遺跡が見つかりました。なかでも中世の遺構には庇をもつ掘立柱建物跡や五輪塔の空風輪が出土するなど、一般的な村落とは異なった様相を示しており、周辺地域で確認されている戦国時代の方形館との関連が注目されます。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様にふれることができ、郷土の歴史学習に幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました株式会社コーリン不動産ならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成29年3月17日

大分市教育委員会
教育長　　　三浦　享二

例　　言

1　本書は、大分市教育委員会が大分市大字猪野字法光寺において、宅地造成に伴い、平成 28 年度に調査を実施した猪野遺跡第 7 次調査地点の成果を記録した発掘調査報告書である。
2　調査は、株式会社コーリン不動産 代表取締役 城野　好則からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
3　発掘調査における遺跡の掘削及び調査記録作成業務については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：豊崎　晃史）がおこなった。
4　遺構の実測・写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：同上）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けおこなった。調査区の航空写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチの依頼を受け、株式会社ふじたがおこなった。
5　報告書に掲載した出土遺物の 1 次整理作業（接合・注記）・実測・製図・遺物写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：永田　裕久）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けおこなった。
6　遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図及び総括図版の作成・製図作業は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：同上）が大分市教育委員会の委託を受けおこなった。
7　本書の執筆は、以下のとおりである。
　第Ⅰ章　小野　綾夏　（大分市教育委員会文化財課）　第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章　永田　裕久（有限会社九州文化財リサーチ）
8　本書の編集は、大分市教育委員会と有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：同上）の双方の企画の下、有限会社九州文化財リサーチがおこなった。
9　出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原 337 番地の 5）に収蔵・保管している。
10　報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。

凡　　例

1　本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
　SB：掘立柱建物跡　SA：柱穴列　SK：土坑　SD：溝状遺構　SP：ピット・柱穴　SX：性格不明遺構
2　本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標 2 系（北緯 33° 0′、東経 131° 0′）の X・Y 座標を基点として表記している。
3　本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭の場合は、矢印で補足している。
4　遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（㎝）で表記している。
5　遺物の法量の内、器高と口径、底径、高台径は以下のとおりに計測している。
　口径：上記の状態で口縁端部外縁の最大径　　器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
　底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径　　高台径：高台端部外縁の最大径
6　本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
　①遺物断面が黒塗りのもの…須恵器・陶器　　②遺物断面が灰色のもの…瓦質土器・瓦器・瓦
　③遺物平面の稜線と調整の変換点…実線　　④調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
7　本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。
　太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集
　坪根伸也・塩地潤一　2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』
　乗岡　実　2005「備前」『全国シンポジウム中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年資料集』
　大分市教育委員会　2016『大友府内 22　中世大友府内町跡第 97・101 次調査』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 141 集

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……………………………… 1
　第 1 節　調査経緯…………………………… 1
　第 2 節　調査組織…………………………… 1
　第 3 節　猪野遺跡の調査履歴一覧表……… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境………………… 2
　第 1 節　地理的環境………………………… 2
　第 2 節　歴史的環境………………………… 2
第Ⅲ章　調査の成果………………………… 4
　第 1 節　調査の概要………………………… 4
　第 2 節　基本層序…………………………… 5
　第 3 節　主要遺構…………………………… 6
　第 4 節　出土遺物…………………………11
第Ⅳ章　総括…………………………………13
　第 1 節　弥生時代の遺構・遺物について…………13
　第 2 節　16 世紀後半の遺構・遺物について …………13

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査経緯

猪野遺跡は、大分市を北流する大分川と大野川に挟まれた鶴崎台地上に所在する埋蔵文化財包蔵地である。近年では、東九州で初めて発掘調査において銅矛埋納遺構を検出し、銅矛埋納の状況が判明した遺跡として注目される。

今回、本遺跡内の大分市大字猪野字法光寺において、平成 28 年５月に、宅地造成計画に伴い開発事業者から文化財課に周知の埋蔵文化財包蔵地の照会がなされた。造成計画上必要とみられる埋蔵文化財発掘調査について株式会社コーリン不動産と文化財課との間で協議をおこない、平成 28 年５月 19 日に埋蔵文化財保護法第 93 条第１項に関する届出と派遣申請書が提出され、平成 28 年６月 21 日付けで大分県教育委員会から工事前の発掘調査を指示する回答があった。これを受けて文化財課では、遺跡の状況の把握をするために確認調査を実施し、その結果、当該地では弥生時代の遺構や遺物が確認され、今回の事業計画である宅地造成工事が遺跡に影響を及ぼすことが判明した。そのため、株式会社コーリン不動産と再度開発内容や発掘調査費用について協議をおこない、協議の末、調査計画等を双方が合意したため､埋蔵文化財発掘調査業務等協定書及び発掘調査委託契約書を平成 28 年７月５日に締結した。

発掘調査は猪野遺跡第７次調査として平成 28 年７月 27 日に着手し、９月７日に調査区の埋め戻しが終了し調査が完了した。調査面積は、600㎡である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続きおこない、報告書の作成を平成 29 年３月 17 日までおこなった。

第２節　調査組織

調査主体者　大分市教育委員会　教育長　三浦　享二

＜平成28年度　調査体制・報告書刊行＞

大分市教育委員会教育部文化財課

課長	塔鼻　光司
参事	長野　清尊
	坪根　伸也
	栗田　博之
特別顧問	玉永　光洋
歴史資料館館長	武富　雅宣
顧問	讃岐　和夫

埋蔵文化財担当班

参事(ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ)	池邉　千太郎
主事	小野　綾夏(調査・整理担当)

管理庶務担当班

主査(ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ)	首藤　敏行
主任	大島　輝
主事	永野　雄介
事務員	中山　美穂

第３節　猪野遺跡の調査履歴一覧表

遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当	調査原因	掲載報告書名	主要遺構
猪野遺跡 第1次調査	大字猪野字栗流	600	1993.05.31～ 1993.06.25	讃岐和夫	集合住宅建設	大分市埋蔵文化財調査年報　vol. 5 1994 猪野遺跡－マンション建設に伴う発掘調査報告書－	・弥生時代中期の土坑・土坑墓 ・中世の断面形状逆台形の溝状遺構 （方形館に伴う溝か）
猪野遺跡 第2次調査	大字猪野字西原	114	1996.01.20～ 1996.01.21	坪根伸也	集合住宅建設	大分市埋蔵文化財調査年報vol.7　1996	・弥生時代後期の竪穴建物跡 ・8世紀中頃前後の東西方向の道路状遺構 （側溝と考えられる２条の溝状遺構）
猪野遺跡 第3次調査	大字猪野字猪野原	292.8	2009.07.23～ 2009.08.21	永松正大 廣瀬育子	集合住宅建設	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第97集 猪野遺跡　第3次調査報告書　2010	・弥生時代中期末～後期の竪穴建物跡 ・中世前半（14世紀中頃）の掘立柱建物跡
猪野遺跡 第4次調査	大字猪野字新土井	115	2010.05.18	佐藤道文 廣瀬育子	宅地造成	大分市埋蔵文化財調査概要報告2011 平成22年度版	・ピット20基 （遺物の出土した遺構はわずかで、弥生時代後期に帰属するものあり）
猪野遺跡 第5次調査	大字猪野字東角	83.5	2011.05.09～ 2011.05.10	長直信	宅地造成	大分市埋蔵文化財調査概要報告2012 平成23年度版	・弥生時代の土坑 ・7～8世紀の土坑 ・京都系土師器が出土
猪野遺跡 第6次調査	大字猪野字西角	180	2013.06.03～ 2013.06.23	松浦憲治	宅地造成	大分市埋蔵文化財調査概要報告2014 平成25年度版	・弥生時代中期の貯蔵穴 ・弥生時代後期前半の中広形銅矛出土土坑
猪野新土井遺跡 第1・2次調査	大字猪野字新土井	5000	1995.04.13～ 1995.10.06	後藤典幸	宅地造成	大分市埋蔵文化財調査年報vol.7　1996	・古墳時代の竪穴建物跡 ・8世紀後半の都城系土師器出土の竪穴建物跡 （掘立柱建物跡約 20 棟　8 世紀末～ 9 世紀初頭越州窯や緑釉陶器・灰釉陶器が出土） ・中世の掘立柱建物跡を囲む方形の溝状遺構
猪野新土井遺跡 第3次調査	大字猪野字新土井	3500	1996.10.15～ 1997.09.06	後藤典幸	宅地造成	大分市埋蔵文化財調査年報vol.8　1997	・東西方向の道路状遺構 ・8世紀末～9世紀初頭の掘立柱建物跡 ・中世の方形の溝状遺構
猪野中原遺跡 第1次調査	大字猪野字中原	2693	1996.05.13～ 1996.10.09	塩地潤一	店舗建設	大分市埋蔵文化財調査年報vol.8　1997	・弥生時代中期の大溝 ・16世紀後半の居館跡 （地鎮遺構、土器埋納遺構、木棺墓、井戸跡、掘立柱建物跡、京都系土師器の出土）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

大分市は九州の北東部に位置しており、北側は別府湾に面している。別府湾に面する一帯には大分平野が広がり、南側には標高約 596 mの霊山を中心とした丘陵が東西方向、西側には標高 628 mの高崎山へ向けて庄ノ原丘陵が延びる。平野の東側には、由布山系を祖流とする大分川や祖母山系を祖流とする大野川の二つの主要河川が別府湾へと北流する。この大分川と大野川に挟まれた標高約 40 m前後の台地が鶴崎台地と呼ばれており、南側の標高 165.3 mの古城山へと南北方向に延びる。台地の東側には横尾面・城原面・松岡面と呼ばれる段丘面が形成されているが、猪野遺跡は台地東側の大半を占める横尾面に位置している。

第１図　大分市の位置図

今回の調査区は、鶴崎台地の東側、南北方向に延びる２本の小さな開析谷によって挟まれ独立した丘陵の南端に位置する。

第２節　歴史的環境

標高約 40 mの鶴崎台地上には、北側より米竹遺跡・地蔵原遺跡・尾崎遺跡・猪野遺跡等が位置している。ここでは猪野遺跡を中心として弥生時代～中世までを概観したい。

弥生時代では、猪野遺跡第１次調査において弥生時代中期～後期初頭の貯蔵穴や土壙墓が（註1）、第３次調査では弥生時代中期の円形竪穴建物跡が確認されている（註2）。また、第１次調査の北東に近接する第６次調査では、弥生時代後期前半の中広形銅矛を埋納した銅矛埋納遺構が確認されている（註3）。大分県内では初めて発掘調査で確認されたもので、銅矛埋納の具体的な過程が理解できる遺構として注目される。猪野新土井遺跡第１・２次調査では、後期の環濠が確認されている（註4）。幅４m、深さ１m、断面は逆台形状を呈し、土製勾玉が出土した。猪野遺跡の北側では、米竹遺跡で中期の貯蔵穴や土坑（註5）、尾崎遺跡で後期前半～末の竪穴建物跡が27基確認されている（註6）。円形・隅丸方形から方形竪穴建物跡への推移が認められている。

古墳時代になると鶴崎台地上では、遺構が激減する。地蔵原遺跡や猪野新土井遺跡第１・２次で展開が見られるが、集落は低地に移動している。

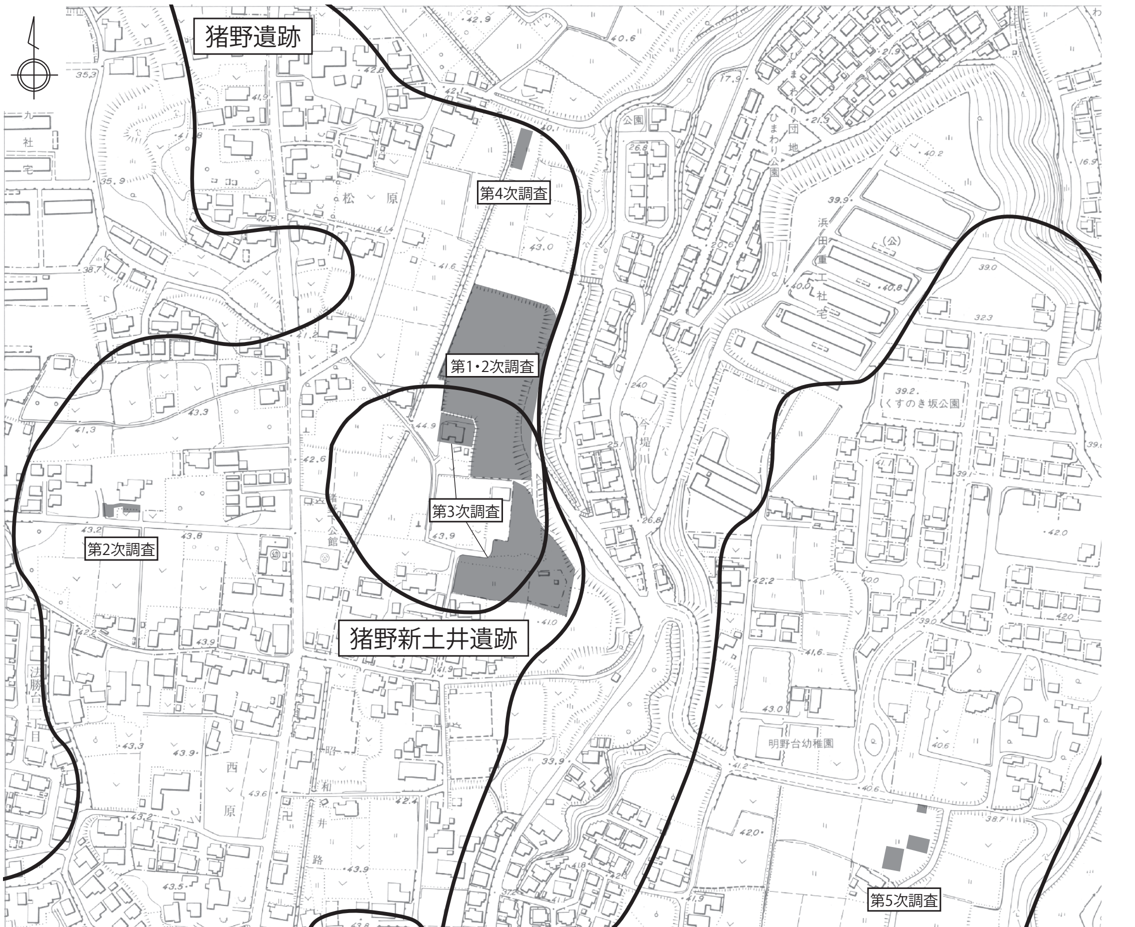
古代では、地蔵原遺跡において「コ」の字状に巡る区画溝の内側に複数の掘立柱建物跡が確認されている（註７）。その一部には軒丸瓦を有した掘立柱建物跡も存在しており、８世紀後半～９世紀にかけて４期の変遷が示されている。また、区画溝の西側にも多数の掘立柱建物跡や蔵骨器の出土など、その性格について、郡衙関連施設の可能性が指摘されている。猪野新土井遺跡では８世紀末～９世紀前半の長方形状に巡る区画溝の中に約 20 棟

番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代
1	横尾遺跡	弥生～近世	13	二目川遺跡	弥生	25	虫喰谷遺跡	旧石器・縄文・奈良
2	横尾貝塚	縄文	14	水分神社銅矛出土	弥生	26	松岡古窯跡群	奈良
3	有田古墳	古墳	15	新田遺跡	古墳	27	久保田遺跡	中世
4	地蔵原遺跡	弥生ほか	16	井ノ久保遺跡	平安	28	上牧ノ内Ⅰ遺跡	奈良・平安
5	尾崎遺跡	弥生	17	毛井遺跡	古墳・中世・近世	29	岡原遺跡	弥生
6	北の崎遺跡	弥生	18	一方平Ⅰ遺跡	旧石器・縄文	30	松岡遺跡	弥生
7	猪野遺跡	弥生	19	一方平Ⅱ遺跡	旧石器・縄文	31	清水遺跡	弥生
8	猪野新土井遺跡	中世	20	一方平Ⅲ遺跡	旧石器・縄文・奈良	32	向原遺跡	弥生
9	猪野中原遺跡	中世	21	一方平Ⅳ遺跡	旧石器・縄文・弥生	33	真萱石棺	古墳
10	米良草遺跡	弥生	22	九池遺跡	旧石器・弥生古墳	34	真萱遺跡	中世・近世以降
11	葛木遺跡	弥生	23	牧の内遺跡	旧石器・縄文	35	毛利空桑墓	近世
12	専想寺遺跡	中世	24	論出遺跡	縄文・弥生・古墳			

第２図　周辺主要遺跡分布図（1/60000）

の掘立柱建物跡が配置される。猪野新土井遺跡第３次調査では、東西方向に延びる道路状遺構が確認されている。猪野遺跡第２次調査では、その延長と考えられる８世紀中頃の道路状遺構が確認されている。

中世の鶴崎台地周辺は、高田荘に比定された地域であり、南北朝時代以降に豊後国の守護である大友氏の所領となる。猪野の史料上の初見は 16 世紀前半と考えられている「大久保氏本地坪付注文」であり、「一所　同庄猪野字」と記載される。また、天文２年（1533）の「高田荘指野目内三貫分坪付注文」や天正５年（1577）の「高田庄間別調帳」にも猪野を見出すことができる。中世の遺構としては、台地の北東隅に千歳城跡が位置し、台地周辺の重要拠点の一つと考えられている。一辺 120 m四方の方形館跡であり、大友氏の一族である吉岡氏の居館とされている。猪野新土井遺跡・猪野中原遺跡（註８）においても、戦国期の半町四方の方形館跡が確認されている。また、猪野遺跡第１次調査においても中世の溝を検出している。コーナー部は確認できないが、周辺の地理的観察から 40 ～ 50 m四方の方形区画となる可能性が想定されている。これらの半町四方の方形館については、猪野名の名主クラスまたは大友被官の給人クラスによって構築されたものと考えられる。

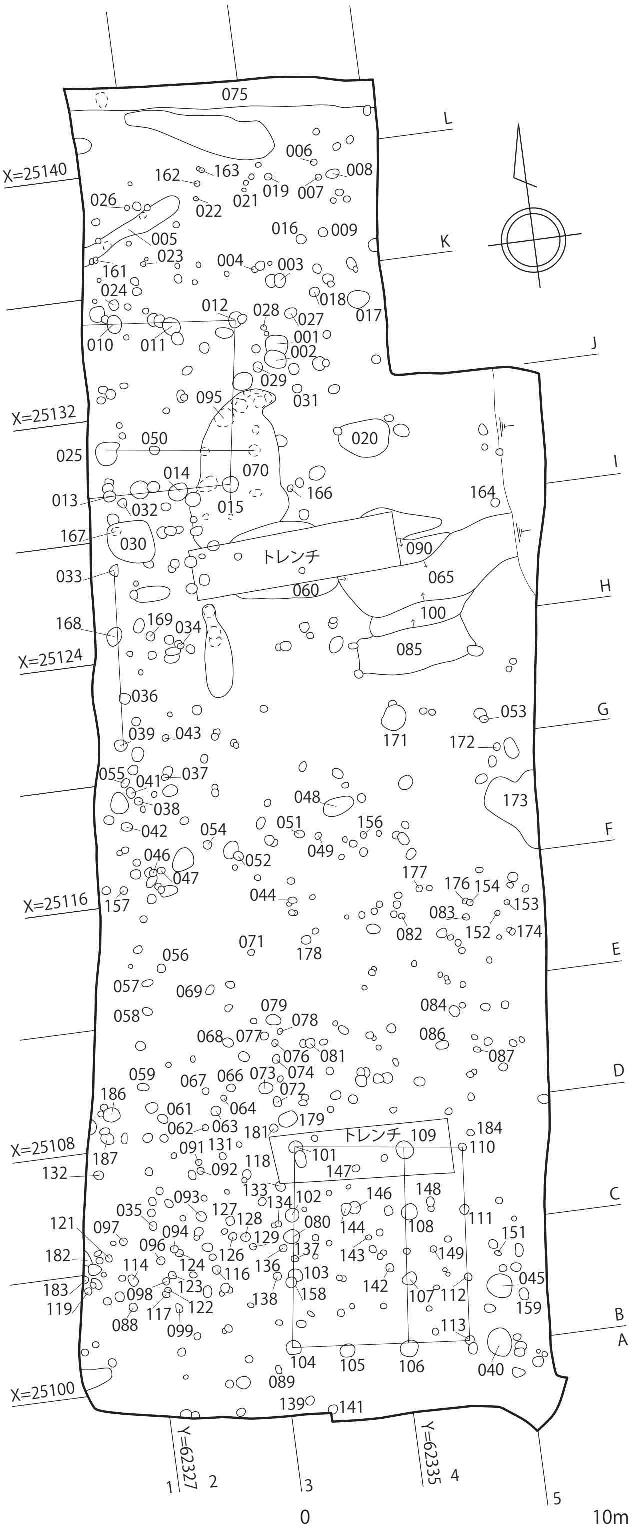


第３図　調査地点位置図（1/5000）

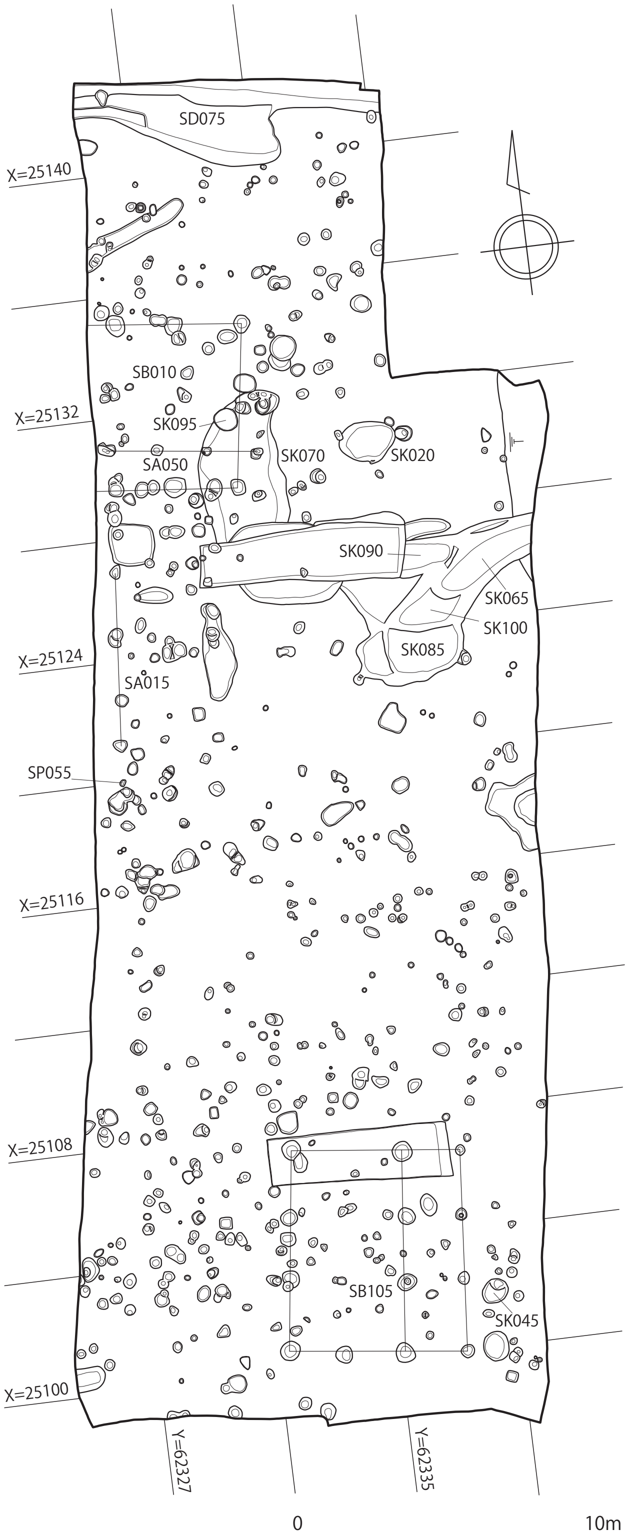
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の概要

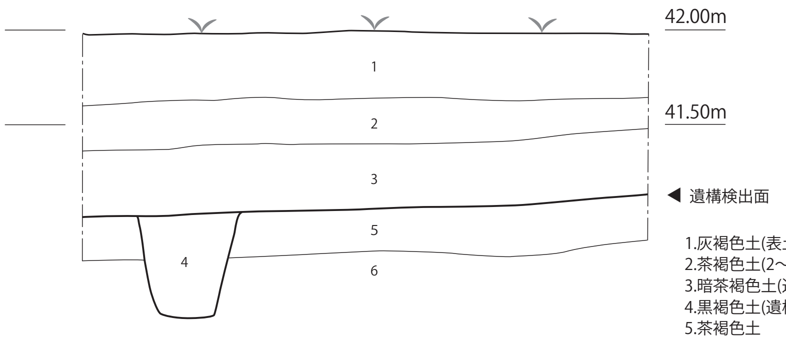
調査地は大分市大字猪野字法光寺に所在し、猪野遺跡の南東側に位置する。今回の調査は、平成 28 年７月 27 日から平成 28 年９月７日の期間に実施した。面積は約 600㎡である。調査の結果、掘立柱建物跡２棟・柱穴列２条・土坑８基・溝状遺構１条・複数のピットが確認された。



第４図　遺構配置図（1/250）



第５図　全体遺構図（1/250）

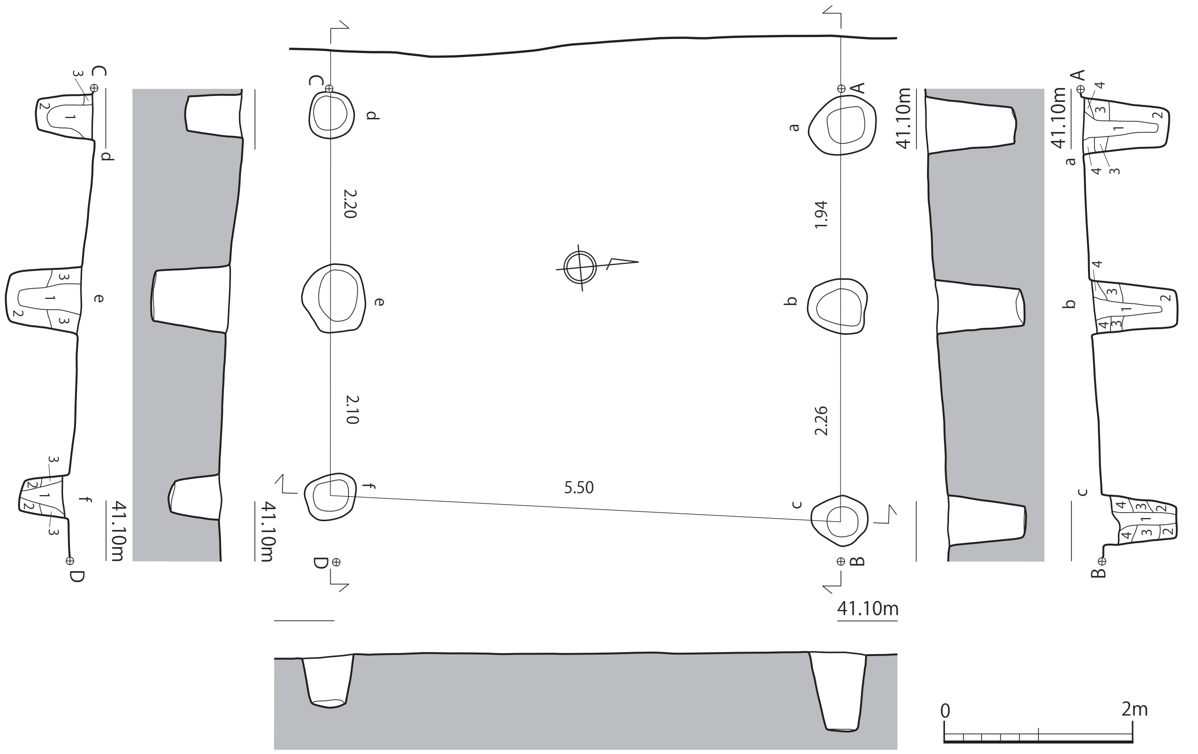


1.灰褐色土(表土)
2.茶褐色土(2～3㎝の砂利が混じる、粒子の粗いブロック土を含む)
3.暗茶褐色土(近世土師質土器や銅版転写の皿を含む、近世の整地層)
4.黒褐色土(遺構埋土)
5.茶褐色土
6.明黄褐色土(安定地盤)

第６図　基本層序

第２節　基本層序（第６図）

調査区南壁を基本層序とした。本調査区の地表標高は約 42 mで、安定地盤の検出標高は約 40.8 mである。この安定地盤から地表までの堆積厚約 1.2 mの層序は、１層の表土、２層の茶褐色土、３層の暗茶褐色土、５層の茶褐色土の順で堆積が認められる。３層の暗茶褐色土の堆積厚は、最大で約 0.35 mで、近世土師質土器胴部片や銅版転写の皿が含まれており、近世～近代の整地層である。５層の茶褐色土の堆積厚は最大で約 0.25 mである。この５層が遺構検出面で、その堆積厚は調査区南側から北側へと浅くなり、北側は後世に削平を受けていることが考えられる。よって、調査区の中央から北端にかけては３層下に明黄褐色土の安定地盤が見られ遺構検出面となる。



a
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 明灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
3. 明灰褐色土
4. 暗灰褐色土(明橙色ブロック土を多く含む)

b
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 明灰褐色土(明橙色ブロック土を含む、しまりなし)
3. 明灰褐色土
4. 暗灰褐色土(明橙色ブロック土を多く含む)

c
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 明灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
3. 明灰褐色土
4. 暗灰褐色土(明橙色ブロック土を多く含む)

d
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 明灰褐色土(粘質)
3. 明灰褐色土(しまりが強い)

e
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 暗茶褐色土(しまりが強い)
3. 暗灰褐色土(明灰色ブロック土を少量含む、粘質)

f
1. 暗灰褐色土(明茶褐色ブロック土を含む、しまりなし)
2. 暗茶褐色土
3. 暗灰褐色土

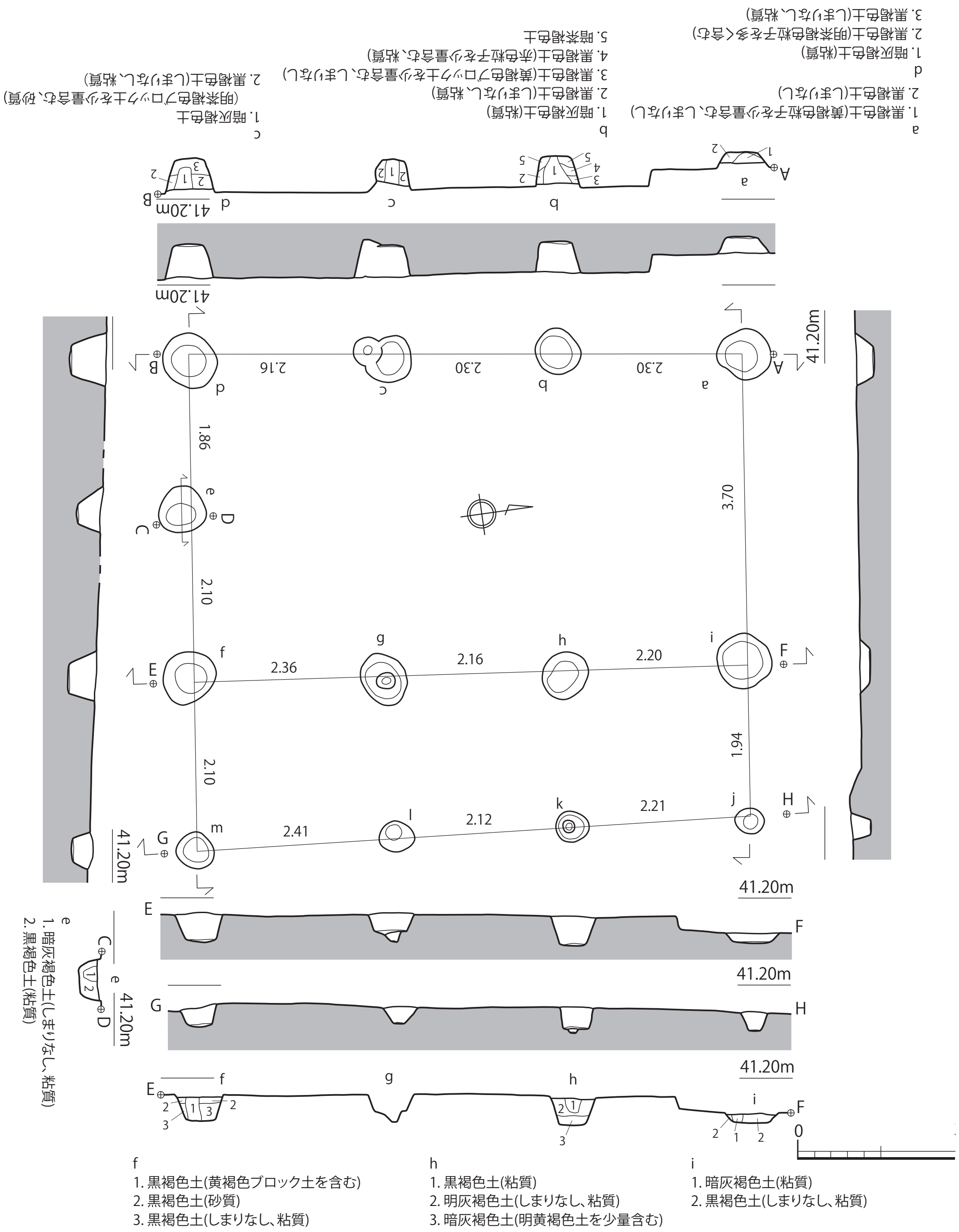
第７図　SB010 遺構実測図（1/80）

第３節　主要遺構

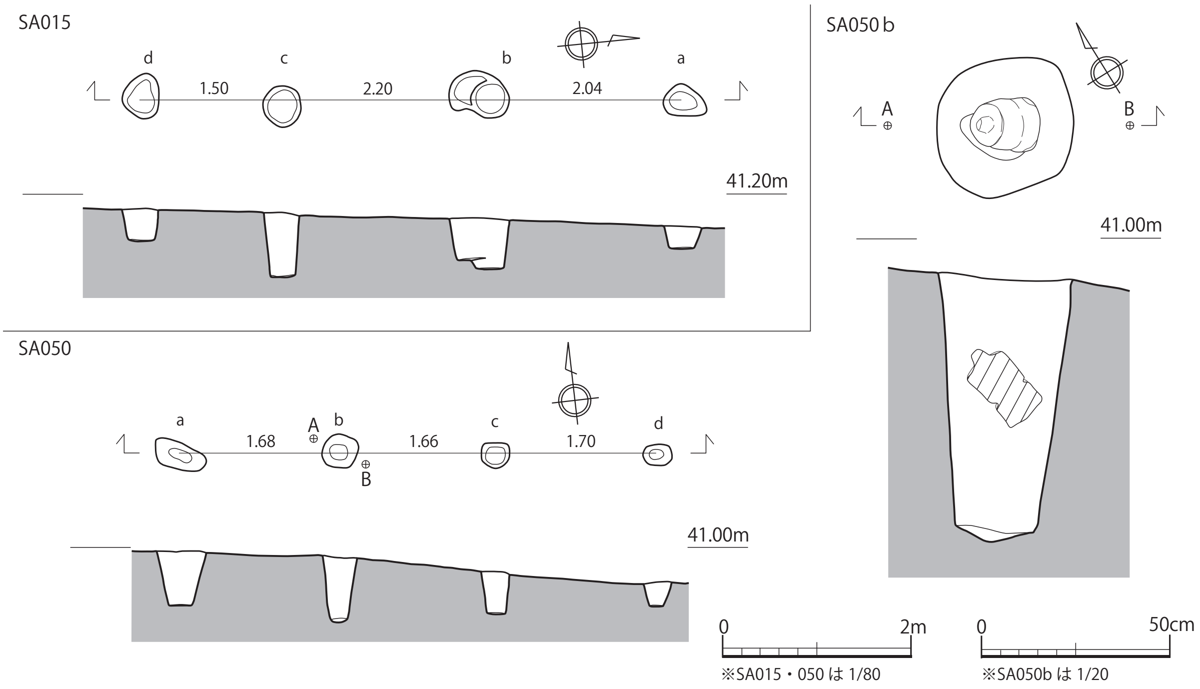
掘立柱建物跡

SB010（第７図）

調査区の北側、I２・I３・J２・J３グリッドで検出し、桁行２間以上×梁間１間を呈し、身舎面積は約 25.4 ㎡を測る掘立柱建物跡である。東西棟の建物で、主軸方向はN－ 84°－Wである。柱穴の平面形状は、楕円形もしくは不整形を呈し、径は約 0.5 ～ 0.8 mである。検出面からの深さは 0.6 ～ 1.0 mと深く、すべての柱穴より柱痕を確認している。柱間は梁間で 5.5 mと幅広く、桁行で 1.94 ～ 2.26 mを測る。柱穴ａより出土した京都系土師器皿Ｃの帰属年代から、16 世紀後半に廃絶したものである。



第８図　SB105 遺構実測図（1/80）



第９図　SA015・050 遺構実測図（1/20・1/80）

SB105（第８図）

調査区の南側、Ａ３・Ａ４・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ３・Ｃ４グリッドで検出し、桁行３間×梁間２間を呈し、身舎面積は 40.2㎡を測る掘立柱建物跡で、東側に庇を有する。南北棟の建物で、主軸方向はＮ－８°－Ｅである。梁間北側の柱穴を１ヶ所欠くが、柱穴の平面形状は、楕円形もしくは不整形を呈し、径は約 0.4 ～ 0.7 ｍである。検出面からの深さは 0.2 ～ 0.4 ｍで、柱穴ｂ・ｃ・ｄ・e・ｆ・ｈ・i より柱痕を確認している。柱間は梁間で 1.86 ～ 3.7 ｍ、桁行で 2.16 ～ 2.36 ｍを測る。古代の土師器片も出土しているが、同一の埋土を有する他の柱穴の出土遺物の帰属年代から、中世に廃絶したものと想定される。

柱穴列

SA015（第９図）

調査区の西側、Ｇ２・Ｈ２グリッドで検出された。柱穴ａ～ｄの４基より構成される延長約 5.7 ｍの柱穴列である。調査区西側に広がり、建物になる可能性もある。主軸方向はＮ－５°－Ｅで、南北方向を指向する。柱穴の平面形は楕円形もしくは不整形で、その径は約 0.2 ～ 0.5 ｍである。検出面からの深さは 0.2 ～ 0.7 ｍとそろわず、その床面の標高も 40.30 ～ 40.70 ｍと高低差がある。柱間は 1.5 ～ 2.2 ｍを測る。柱穴ａからは備前焼擂鉢が出土しており、その帰属年代から 16 世紀後半に廃絶したものである。

SA050（第９図）

調査区の北側、Ｉ２・Ｉ３グリッドで検出され、SK070 によって切られる柱穴列である。柱穴ａ～ｄの４基より構成され、延長約 5.1 ｍを測る。主軸方向はＮ－ 83°－Ｗで、東西方向を指向する。柱穴の平面形は楕円形もしくは不整形で、その径は約 0.3 ～ 0.6 ｍである。検出面からの深さは 0.2 ～ 0.7 ｍと一定ではないが、その床面の標高は全て約 40.30 ｍ付近を呈する。柱間は 1.66 ～ 1.7 ｍを測る。柱穴ｂからは五輪塔の空風輪が出土しており、その帰属年代から 16 世紀後半に廃絶したものと考えられる。

土坑

SK020（第 10 図）

調査区北側のＩ４グリッドで検出された土坑である。平面形状は楕円形を呈し、その規模は長軸約 1.9 m×短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 0.2 mである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向はＮ－84°－Ｅである。埋土は暗灰褐色土の単一層であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は小片であるが、糸切り離し痕の残る土師器底部片が出土している。出土遺物の帰属年代から、13 ～ 14 世紀に埋没したものである。

SK045（第 10 図）

調査区南側のＢ４グリッドで検出された土坑である。平面形状は楕円形を呈し、その規模は径約 0.8 m、検出面からの深さは約 0.3 mである。床面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。北側に深さ約 0.15 mのピット状の掘り込みを有するが、切り合いが認められない事から本土坑に伴うものと考えられる。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。埋土は黒褐色土及び明黄褐色土が斜めに流入しており、自然堆積である。遺物は弥生土器甕が出土している。出土遺物の帰属年代から、弥生時代中期後半に埋没したものである。

SK065・085・090・100（第 10 図）

調査区北側のＨ４・Ｈ５グリッドで検出された土坑で４基が重複する。その切り合いは、SK065 が SK090・100 を切り、SK100 が SK085 を切る。

SK065 の平面形状は細長い不整形を呈し、その規模は長軸約 6.4 m＋α×短軸約 1.8 m、検出面からの深さは約 0.5 mである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向はＮ－ 58°－Ｗである。埋土は暗灰褐色土の単一層であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師質土器鍋・瓦器椀・京都系土師器皿Ｃ・近世磁器碗が出土している。

SK085 の平面形状は不整形を呈し、その規模は長軸約 3.5 m＋α×短軸約 1.7 m、検出面からの深さは約 0.4 mである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。土坑内には５～ 20㎝の礫石が多量に含まれていた。主軸方向はＮ－ 87°－Ｅである。埋土は明黄褐色土、黒褐色土が斜めに流入しており自然堆積である。遺物は五輪塔の空風輪・瓦質土器鉢・須恵器甕胴部等が出土している。

SK090 の平面形状は楕円形を呈し、その規模は長軸約 1.6 m＋α×短軸約 1.2 m、検出面からの深さは約 0.4 mである。床面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。主軸方向はＮ－ 85°－Ｗである。埋土は明灰褐色土、明茶褐色土が交互に水平堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器小片のみの出土である。

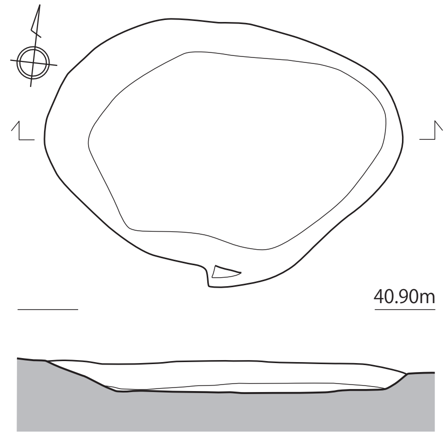
SK100 の平面形態は不明であるが、確認できた規模は長軸約 1.8 m＋α×短軸約 2.0 m＋α、検出面からの深さは約 0.4 mである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向はＮ－ 85°－Ｗである。埋土は暗灰色土、黒褐色土、暗灰褐色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積である。遺物は土師器甕・瓦質土器胴部片のみの出土である。

時期について、SK085 が 16 世紀後半、SK090 が近世以前、SK065・SK100 が近世にそれぞれ埋没したものと考えられる。

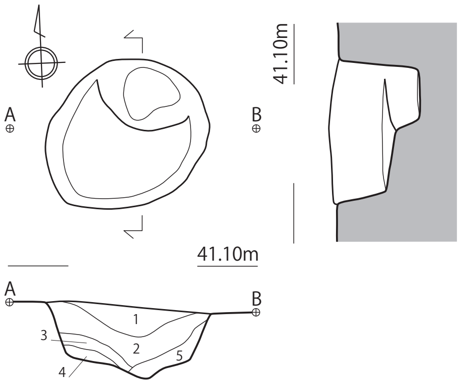
SK070（第 10 図）

調査区北側の H3・I3・J3 グリッドで検出された土坑である。SA050・SK095 を切り、SB010・S060 によって切られる。平面形状は不整形を呈し、その規模は長軸約 5.0 m＋α×短軸約 2.9 m、検出面からの深さは約 0.06 ～ 0.12 mと浅い。床面は北側より南側へと緩やかに傾斜し、壁面は急角度で立ち上がる。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。埋土は黒褐色土及び暗灰褐色土が斜めに流入することから自然堆積である。遺物は須恵質土器胴部・平瓦片が出土している。SA050 を切り、SB010 に切られることから 16 世紀後半に埋没したものである。

SK020



SK045

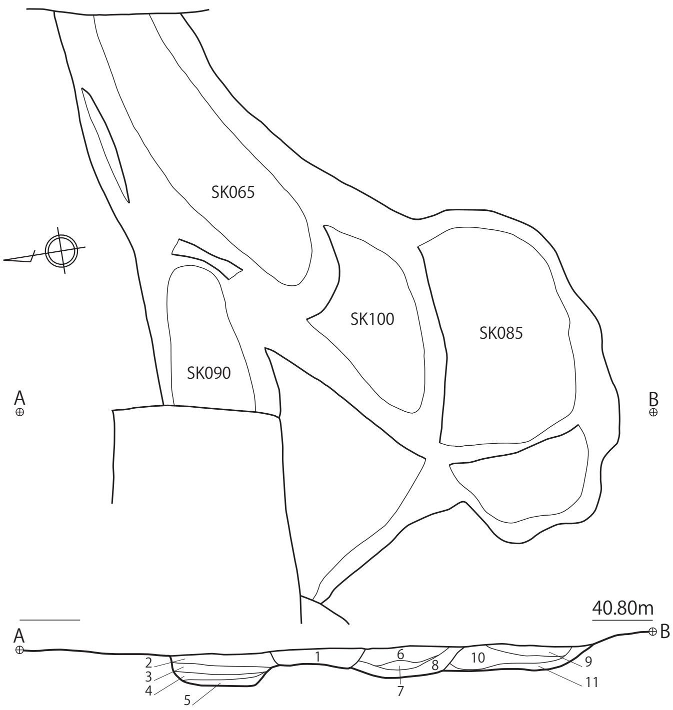


1. 黒褐色土(やや粘質)
2. 黒褐色土(黄褐色ブロック土を含む、粘質)
3. 黒褐色土(黄褐色ブロック土を少量含む、砂質)
4. 明黄褐色土(しまりあり、砂質)
5. 明黄褐色土(黒色ブロック土を少量含む、しまりあり、砂質)

0　1m

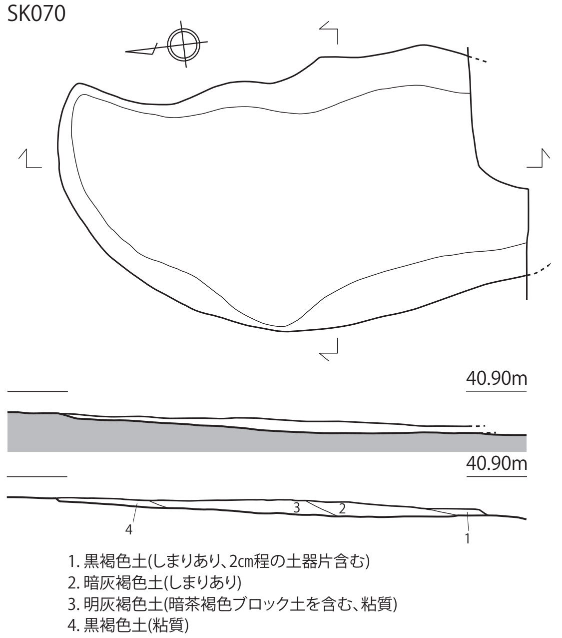
※SK020・045 は 1/40

SK065



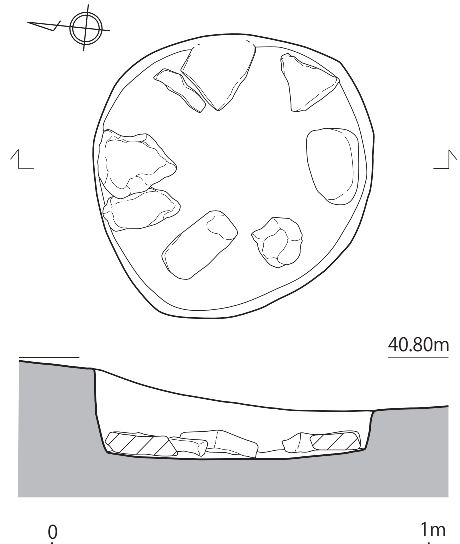
1. 暗灰褐色土(橙色ブロック土を少量含む、4～5㎝の礫を含む、粘質) SK065の埋土
2. 明灰褐色土(粘質)
3. 明茶褐色土(粘質)
4. 明茶褐色土(明黄褐色ブロック土を多く含む、粘質)
5. 暗灰褐色土(粘質)
SK090の埋土
6. 暗灰色土(明黄褐色ブロック土を少量含む、粘質)
7. 黒褐色土
8. 暗灰褐色土(橙色ブロック土を少量含む)
SK100の埋土
9. 暗灰色土(5～20㎝大の礫を含む、粘質)
10. 明黄褐色土
11. 黒褐色土(粘質)
SK085の埋土

SK070



1. 黒褐色土(しまりあり、2㎝程の土器片含む)
2. 暗灰褐色土(しまりあり)
3. 明灰褐色土(暗茶褐色ブロック土を含む、粘質)
4. 黒褐色土(粘質)

SK095



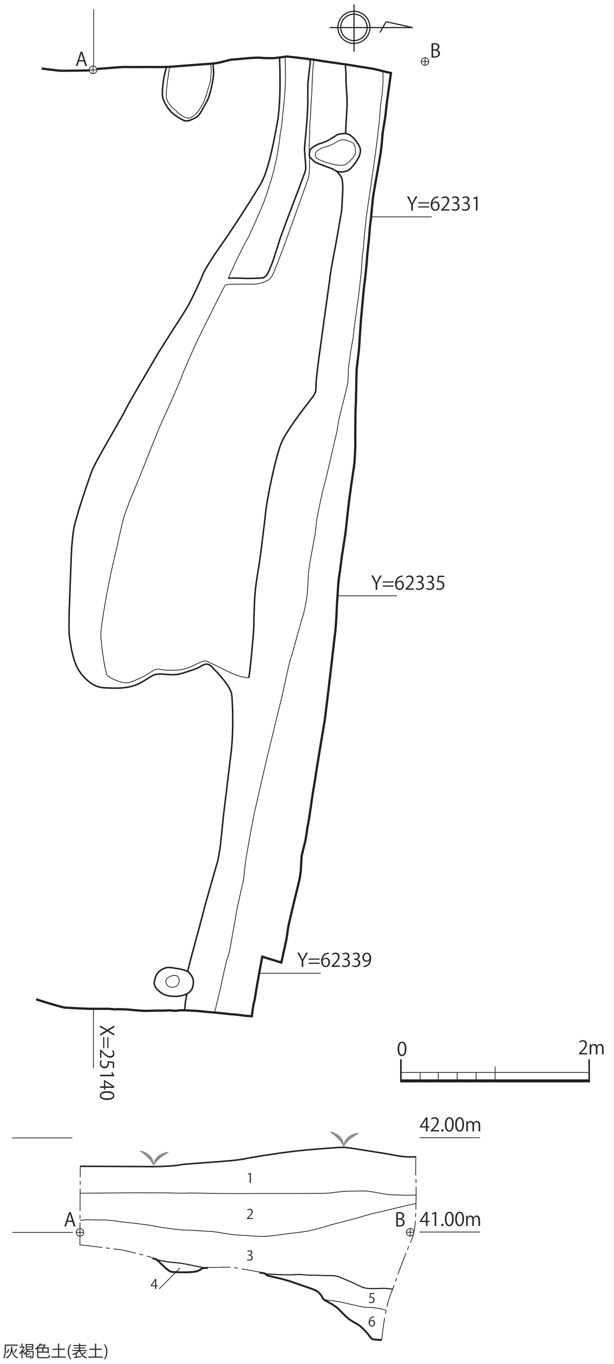
0　1m

※SK095 は 1/20

0　2m

※SK065・070 は 1/80

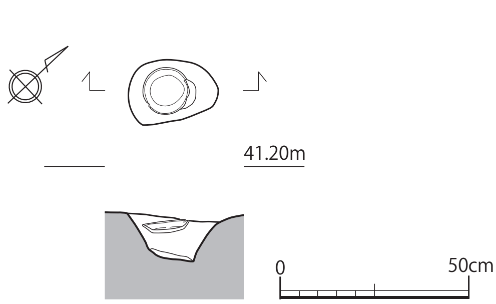
第 10 図　SK020・045・065・070・095 遺構実測図（1/20・1/40・1/80）



1. 灰褐色土(表土)
2. 茶褐色土(2〜3㎝の砂利が混じる、粒子の荒いブロック土を含む)
3. 暗茶褐色土(黄褐色ブロック土を一定量含む、しまり強い、近世〜明治の遺物を含む)
4. 明灰褐色土
5. 暗茶褐色土(黄褐色ブロック土を一定量含む、ややしまる)
6. 黒褐色土(黄褐色ブロック土を少量含む、5〜10㎝程の礫を含む　ややしまる)

（5・6：SD075の埋土）

第 11 図　SD075 遺構実測図（1/80）



第 12 図　SP055 遺構実測図（1/20）

SK095（第 10 図）

調査区北側の I3 グリッドで検出された土坑で、SK070 によって切られる。平面形状は円形を呈し、その規模は径約 0.7 m、検出面からの深さは約 0.2 mである。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向はＮ－ 6°－ W である。土坑内には、河原石や角礫を壁面に沿うように円形状に配置している。遺物は弥生土器甕が出土している。出土遺物の帰属年代から、弥生時代中期後半に埋没したものである。

溝状遺構

SD075（第 11 図）

調査区北端の L2・L3・L4・L5 グリッドで検出された溝状遺構である。東西方向へと直線的に延びるが、南側辺のみの確認であり、北側辺は調査区外となる。よって、断面形状は不明である。確認できた規模は、長さ約 10 m、幅約 1.4 m＋ α 、深さは検出面より約 0.7 mである。主軸方向はＮ－ 86°－Wをとる。埋土は上層に暗茶褐色土、下層に黒褐色土が堆積するもので、水流に伴う鉄分の沈着や粘質層はみられない。遺物は土師質土器甕・龍泉窯系青磁碗が出土している。出土遺物の帰属年代から、17 世紀以降に埋没したものである。

ピット

SP055（第 12 図）

調査区のＦ２グリッドで検出された柱穴である。平面形状は楕円形を呈し、その規模は長軸約 0.3 m×短軸約 0.2 m、検出面からの深さは約 0.1 mと浅い。柱穴の中央からは土師器坏Ａの完形品が出土している。出土遺物の帰属年代から９世紀に埋置されたものである。

第４節　出土遺物

今回の調査では、コンテナ５箱分の遺物が出土している。出土遺物の時期は、弥生時代中期～近世と幅広い。第 13 図に掲載した遺物の種類・器種・法量・胎土等については、遺物観察表（第４～７表参照）にて報告している。また、全遺構の出土遺物については、遺構出土遺物一覧表（第１～３表参照）に掲載している。ここでは、特に重要と思われる遺物についてのみ述べる。

SB010 出土遺物（第 13 図）

１は SB010a より出土した京都系土師器皿 C である。口縁部は強く外反し、端部はやや尖り気味である。

SA015 出土遺物（第 13 図）

６は SA015a より出土した備前焼擂鉢の口縁部片である。口縁部はやや内傾し、外面に凹線を、端部内面には明瞭な稜もしくは段を有している。内面には、交差状に摺り目が施される。

SK085 出土遺物（第 13 図）

12・13 は五輪塔の空風輪で、凝灰岩を石材としている。その形状について、風輪の断面は高い長方形状で、空輪よりも大きく成形される。空輪は、低い断面長方形状で、頂部は三角形状を呈しており、宝珠形をなしていない。空輪・風輪の幅は同一で、枘は三角形状を呈する。

SD075 出土遺物（第 13 図）

15 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、端部は外反する。内外面に施釉される。

SP009 出土遺物（第 13 図）

16 は龍泉窯系青磁坏の口縁部片である。小片で不明瞭ではあるが、口縁部は輪花状を呈すると思われる。

SP035 出土遺物（第 13 図）

21 は土師器の甕である。口縁部は緩やかに外反し、その中程が肥厚する。頸部は強く屈曲し、楕円状の胴部へと至る。最大径は胴部の上半に位置するが、その径は口径に等しい。調整は、外面に工具ナデ、内面にケズリが施される。

SP055 出土遺物（第 13 図）

22 は土師器坏 A の完形品である。ヘラ切り離しの底部より、体部はハ字状に開いて立ち上がる。口縁端部内面には、段を有している。調整は、内外面回転ナデが施される。

SP093 出土遺物（第 13 図）

28 は弥生土器の二重口縁壺である。複合部は短く内傾し、外面には鋸歯文が施される。

SP118 出土遺物（第 13 図）

30 は弥生土器壺の底部である。平底で、外面にハケメ、内面にナデが施される。

検出時出土遺物（第 13 図）

35 は京都系土師器皿 C である。体部は口縁部へとハ字状に大きく開いて立ち上がる。36 は備前焼の胴部片である。外面に断面三角形状の突帯が１条貼付けられる。37 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－ b 類の胴部片である。

第13図　出土遺物実測図（1/4・1/8）

第Ⅳ章　総括

第１節　弥生時代の遺構・遺物について

調査区の北・南端において確認した SK045・095 は、出土した東北部九州系土器甕から弥生時代中期後半と判断される。ともに平面形態は円形状を呈しており貯蔵穴とも考えられるが、米竹遺跡等で見られる大分平野で一般的な貯蔵穴の特徴である床面中央の柱穴等は見られない。調査区内から出土する弥生土器は、在地の下城式土器甕及び東北部九州系土器甕であり、典型的な須玖式土器等は認められなかった。赤色顔料の塗布された土器片も出土しており、周囲に祭祀に関連する遺構の展開も考えられる。これまで猪野遺跡で実施された６次の調査で確認された弥生時代の遺構は、第１次調査の中期～後期初頭の貯蔵穴・土壙墓、第３次調査の中期末～後期前半の円形竪穴建物、第６次調査の後期前半の銅矛埋納遺構等がある。こうした遺構の分布状況から弥生時代の集落の展開は、竪穴建物跡の確認された第３次調査区の位置する台地の西側が中心であったと想定される。

第２節　16 世紀後半の遺構・遺物について

調査区北側に位置する掘立柱建物跡（SB010）・柱穴列（SA050）・土坑（SK085）は 16 世紀後半の遺構で、京都系土師器皿Ｃや五輪塔の空風輪が出土している。京都系土師器皿Ｃについては、SB010・SK065・SP144 や調査区南側の検出時と、点数は少ないがその出土は全体におよんでいる。調査区北端の SD075 は、出土した土師質土器片から 17 世紀としたが、SB010 と主軸がほぼ同一であり、その掘削は 16 世紀まで遡る可能性も考えられる。土層観察から鉄分の沈着や粘質層の堆積は認められず、区画溝と想定される。

これまでの猪野遺跡第１次調査・猪野中原遺跡第１次調査・猪野新土井遺跡第３次調査では、戦国期の方形館や掘立柱建物跡等が確認されている。方形館は半町四方の規模を有し、京都系土師器が出土することから、その構築について猪野名の名主クラスまたは大友被官の給人クラスの在地領主によるものと指摘されている。また、第７次調査区の東側に隣接する民家の北側においては、コーナー部を有する溝状遺構が現在でも残り、方形館の溝である可能性も考えられる。今回の調査で確認できた掘立柱建物跡や京都系土師器皿Ｃの出土はこのような名主・被官クラスの屋敷にともなうものとの想定もできよう。

また、調査区周辺の小字が「法光寺」と呼ばれることから、法光寺に関連する遺構である可能性も指摘できる。法光寺について、江戸時代中期の臼杵藩領内の寺社について記載した『寺社考』(註 9) には、「一、寶光寺　同村（猪野村）」と見える。『寺社考』に寶光寺の詳細が記載されておらず不明であるが、法光寺と同一の寺院を指す可能性は高いものと想定できよう。現在、調査区の東側 270 ｍの葛木集落内には、「法弘寺」が位置している。この法弘寺について「寺社考」に記載は無いが、「明治村史」(註 10) には「浄土宗寺ニシテ葛木部落内ニアル、大分ノ来迎寺ノ檀家三十余戸ニ対シ之カ代理ヲナスニ留マル」とみえる。法光寺との関連は不明であるが、江戸時代末～近代にかけて猪野村から隣村である葛木村に移転した可能性も考えられよう。

16 世紀後半の遺構について、名主・被官クラスの在地領主や法光寺との関連が想定されるが、それを明確に判断できる遺構・遺物は確認できていない。SD075 の性格についても同様であり、今後、周辺地域の調査には留意する必要がある。

引用・参考文献

註１　大分市教育委員会　1994　『猪野遺跡－マンション建設に伴う発掘調査報告書－』
註２　大分市教育委員会　2010　『猪野遺跡第３次調査報告書』　大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 97 集
註３　大分市教育委員会　2014　「猪野遺跡第６次調査」『大分市埋蔵文化財調査概要報告 2014』　平成 25 年度
註４　大分市教育委員会　1997　「猪野新土井遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報８』　1996 年度
註５　大分市教育委員会　2014　『米竹遺跡６』　大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 133 集
註６　大分市教育委員会　1984　『尾崎遺跡』　－大分市立明治北小学校建設に伴う発掘調査概報－
註７　真野和夫　1984「地蔵原と弥勒寺の遺跡」『大分県史』古代編Ⅱ
註８　大分市教育委員会　1997　「猪野・中原遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報８』　1996 年度
註９　臼杵藩の郡奉行であった太田重澄によって寛保元年（1741）に著されたもので、藩内 1352 ヶ所の寺社の内、472 ヶ所が収録されている。追加補足が、加嶋英国（天明二年（1782）生～安政元年（1854）没）によってなされたと考えられており、寶光寺は追加の中に記載される。
註 10　明治村史編纂委員会　1979　『明治村史』

○ 方形館　◎ 掘立柱建物　△ 土器埋納遺構　★ 五輪塔
● 溝状遺構　▲ 道路状遺構　☆ 京都系土師器皿

※谷状地形の復元は、昭和 50 年撮影の空中写真を参考とした。
※点線は字境である。ラインは推定であり、正確なものではない。

第 14 図　16 世紀後半の遺構分布図（1/5000）

第1表　遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	種別	地区	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期
1	SK001	土坑	J3・4	暗灰褐色	土師器：口縁部・胴部	001→002		古墳
2	SP002	ピット	J3・4	明灰褐色		001→002		―
3	SP003	ピット	J4	黒褐色	土師器：胴部片			古墳
4	SP004	ピット	K3	黒褐色	弥生土器：甕（口縁部）　土師器：胴部片			―
5	SD005	溝	K2・3	黒褐色	弥生土器：甕（中期後半）底部片・壺（後期）口縁部小片 土師器：口縁部・胴部			古墳以降
6	SP006	ピット	K4	黒褐色	土師器：胴部片			古墳以降
7	SP007	ピット	K4	黒褐色	土師器：胴部片			―
8	SP008	ピット	K4	黒褐色	土師器：坏 底部(糸切り)・甕 胴部（布留系か）・破片			中世
9	SP009	ピット	K4	暗灰褐色	土師器：胴部片　龍泉窯系青磁：坏（口縁部）			中世
10	SP010	ピット	J2	暗茶褐色	土師器：皿C	070→010	SB010a	16世紀後半
	SP011	ピット	J3	暗茶褐色	土師器：破片　須恵器：胴部片（タタキあり）		SB010b	
	SP012	ピット	J3	暗茶褐色	土師器：破片		SB010c	
	SP013	ピット	I2	暗茶褐色			SB010d	
	SP014	ピット	I3	暗茶褐色			SB010e	
	SP015	ピット	I3	暗茶褐色	土師器：頸部片		SB010f	
15	SP033	ピット	H2	明灰褐色	国産陶器：備前　擂鉢（口縁部・交差目擂鉢）		SA015a	16世紀後半
	SP168	ピット	H2	明灰褐色	土師質土器：鍋（格子目タタキ）		SA015b	
	SP036	ピット	G2	黒褐色			SA015c	
	SP039	ピット	G2	黒褐色	土師器：坏（古代）口縁部・破片		SA015d	
16	SP016	ピット	K4	暗灰褐色	弥生土器：胴部片　鉄製品：板状鉄製品			弥生以降
17	SP017	ピット	J4	黒褐色	土師器：甕（胴部）・坏（口縁部（古代）・坏（底部）　須恵器：甕（胴部）			古代（8世紀以降）
18	SP018	ピット	J4	暗灰褐色	土師器：破片			―
19	SP019	ピット	K4	黒褐色	弥生土器：甕（刻目突帯・中期前半）口縁部			弥生中期前半
20	SK020	土坑	I4	明灰褐色	土師器：胴部・小皿か（古代・中世前半）底部（糸切り）			13～14世紀
21	SP021	ピット	K3	黒褐色	土師器：破片			―
22	SP022	ピット	K3	明灰褐色	土師器：破片			―
23	SP023	ピット	K3	黒褐色	弥生土器：胴部（突帯2条）			弥生
24	SP024	ピット	J2	暗灰褐色	土師器：破片			―
25	SK025	土坑	I2	暗茶褐色				―
26	SP026	ピット	K2	黒褐色	土師器：胴部片			―
27	SP027	ピット	J4	暗茶褐色	土師器：底部（ヘラ切り）・破片			古代
28	SP028	ピット	J3	暗灰褐色	土師器：破片			―
29	SP029	ピット	J3	明灰褐色	土師器：坏 底部（ミガキあり）・破片			古代（9世紀初）
30	SK030	土坑	H2・I2	明茶褐色		167→030		―
31	SP031	ピット	J4	暗茶褐色	土師器：底部（ミガキあり）			古代
32	SP032	ピット	I2	黒褐色	土師器：頸部			古墳
34	SP034	ピット	H2・3	暗灰褐色	土師器：胴部・底部　石製品：砥石			―
35	SP035	ピット	C2	暗灰褐色	P1：土師器（甕）・P2：土師器胴部 弥生土器：胴部（赤色顔料）　土師器：胴部・口縁部（古代か）			古墳（5世紀代）
37	SP037	ピット	G2	黒褐色	土師器：破片			―
38	SP038	ピット	F2	黒褐色	土師器：破片			―
40	SK040	土坑	A4・B4	黒褐色	土師器：破片			―
41	SP041	ピット	F2	暗灰褐色	土師器：破片			―
42	SP042	ピット	F2	黒褐色	土師器：破片			―
43	SP043	ピット	G2	黒褐色	土師器：破片			―
44	SP044	ピット	E3	黒褐色	土師器：破片　土師質土器（鍋）			中世
45	SK045	土坑	B4	黒褐色	弥生土器：甕（口縁部）　土師器：胴部片			弥生中期
46	SP046	ピット	F2	暗茶褐色	土師器：甕（頸部・胴部）			―
47	SP047	ピット	F2	暗灰褐色	土師器：胴部片（古代　ミガキあり）			古代
48	SP048	ピット	F3・4	暗灰褐色	土師器：胴部片			―
49	SP049	ピット	F3	暗灰褐色	縄文土器片か			―
50	SA050	ピット	I2	暗灰褐色	石製品：五輪塔（空風輪）	050→070	SA050b	16世紀後半
51	SP051	ピット	F2	明灰褐色	土師器：坏（底部）			古代
52	SP052	ピット	F3	暗灰褐色	土師器：口縁部・胴部（穿孔あり）・破片			古墳
53	SP053	ピット	G5	暗灰褐色	土師器：破片			―
54	SP054	ピット	F2	明灰褐色	土師器：胴部片			―
55	SP055	ピット	F2・G2	暗灰褐色	土師器：坏（ヘラ切り）			9世紀
56	SP056	ピット	E2	暗灰褐色	弥生土器：甕（口縁部）・胴部片			弥生中期
57	SP057	ピット	E2	暗灰褐色	土師器：坏（古代）底部　・坏A（中世）底部			中世（前半）
58	SP058	ピット	E2	暗灰褐色	土師器：破片			―

第２表　遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	種別	地区	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期
59	SP059	ピット	D2	黒褐色	土師器：坏（口縁部）・坏A 底部（糸切り）・胴部片　土師質土器：鍋片			中世（前半）
60	SK060	土坑	H3・4	黒褐色	土師器：坏 底部（ヘラ切り）・胴部片			古代
61	SP061	ピット	D2	暗灰褐色	土師器：胴部片（突帯あり）・口縁部（9世紀か）			古代
62	SP062	ピット	D2	暗灰褐色	弥生土器：甕（口縁部）　土師質土器：鍋片			中世
63	SP063	ピット	D2	暗茶褐色	土師器：胴部片			―
64	SP064	ピット	D2	黒褐色	土師器：破片（中世か）			―
65	SK065	土坑	H4・5	暗灰褐色	弥生土器：甕（底部）　土師質土器：鍋 瓦質土器：破片　瓦器：椀（底部）　土師器：皿C　近世磁器：碗	090→065 100→065		近世
66	SP066	ピット	D2	黒褐色	弥生土器：甕（口縁部）　土師器：胴部片			弥生か
67	SP067	ピット	D2	黒褐色	土師器：頸部・破片			―
68	SP068	ピット	D2	黒褐色	土師器：破片			―
69	SP069	ピット	E2	黒褐色	土師器：壺（口縁部片）・土師器（ミガキあり）			古代
70	SK070	土坑	H3・I3・J3	明灰褐色	土師器：破片　須恵質土器：（中世か）　瓦類：平瓦片	095→070→010		16世紀後半
71	SP071	ピット	E3	黒褐色	土師器：破片			―
72	SP072	ピット	D3	明灰褐色	土師器：胴部片			―
73	SP073	ピット	D3	明灰褐色	土師器：破片			―
74	SP074	ピット	D3	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部・甕 底部（厚底）			弥生中期
75	SD075	溝	L2・3・4・5	暗茶褐色	弥生土器：甕（底部）　土師器：鉢（底部） 土師質土器：甕　（口縁部（17世紀代か）　龍泉窯系青磁：碗（口縁部）			17世紀
76	SP076	ピット	D3	黒褐色	土師器：破片			―
77	SP077	ピット	D3	明茶褐色	土師器：破片			―
78	SP078	ピット	D3	黒褐色	土師器：椀（口縁部）			―
79	SP079	ピット	D3	黒褐色	土師器：甕（口縁部・胴部片）			古墳
80	SP080	ピット	C3	黒褐色	土師器：胴部片			―
81	SP081	ピット	D3	明灰褐色	弥生土器：（突帯あり）			弥生後期
82	SP082	ピット	E4	暗灰褐色	土師器：胴部片			弥生以降
83	SP083	ピット	E4	暗灰褐色	弥生土器：甕（口縁部 刻目突帯・中期前半）			弥生中期
84	SP084	ピット	D4	暗灰褐色	土師器：椀（底部 高台欠く）・破片			古代（10世紀代）
85	SK085	土坑	G4・5	暗灰色	土師器：複合口縁壺（口縁部）　須恵質土器：甕（胴部） 土師質土器：胴部　瓦質土器：鉢（胴部） 国産陶器：備前（胴部片）　石製品：五輪塔（空風輪）	085→100		16世紀後半
86	SP086	ピット	D4	明灰褐色	土師器：破片			―
87	SP087	ピット	D4	明灰褐色	土師器：破片			―
88	SP088	ピット	B1	暗灰褐色	弥生土器：高坏 脚部（赤色顔料　弥生中期）			弥生中期
89	SP089	ピット	B2	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部（刻目突帯　中期前半）　土師器：甕（口縁部・胴部）			弥生中期
90	SK090	土坑	H4・5	明灰褐色	土師器：破片	090→065		近世以前
91	SP091	ピット	C2	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部（突帯あり）			弥生中期
92	SP092	ピット	C2	明灰褐色	土師器：破片			―
93	SP093	ピット	C2	明灰褐色	弥生土器：二重口縁壺（複合部に鋸歯文あり）・甕 口縁部 土師器：口縁部			弥生中期～後期
94	SP094	ピット	C2	明灰褐色	土師器：小皿（口縁部）・胴部片			中世前半
95	SK095	土坑	I3	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部　土師器：胴部	095→070	集石遺構か？	弥生中期
96	SP096	ピット	B2	明灰褐色	土師器：破片			―
97	SP097	ピット	C1	暗灰褐色	弥生土器：胴部（赤色顔料）・甕 底部（後期）　土師器：胴部			弥生後期
98	SP098	ピット	B2	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部（口唇部 刻目・刻目突帯）　土師器：胴部			弥生中期
99	SP099	ピット	B2	暗灰褐色	土師器：破片			―
100	SK100	土坑	G4・H4	暗灰色	土師器：甕（頸部・胴部）　瓦質土器：胴部	085→100→065		近世
105	SP101	ピット	C3	黒褐色	土師器：甕（口縁部・胴部）		SB105a	中世
	SP102	ピット	C3	黒褐色	土師器：甕 口縁部（ミガキあり）		SB105b	
	SP103	ピット	B3	黒褐色	土師器：破片		SB105c	
	SP104	ピット	B3	黒褐色	弥生土器：甕 口縁部　土師器：胴部		SB105d	
	SP105	ピット	B3	黒褐色	土師器：口縁部（古代 9世紀代）・胴部		SB105e	
	SP106	ピット	A3・A4・B3・B4	黒褐色	弥生土器：甕 底部（弥生中期後半）　土師器：破片		SB105f	
	SP107	ピット	B4	黒褐色	土師器：坏 口縁部（古代）・破片		SB105g	
	SP108	ピット	C4	黒褐色	弥生土器：甕 口縁部　土師器：胴部		SB105h	
	SP109	ピット	C4	黒褐色	土師器：甕 口縁部		SB105i	
	SP110	ピット	C4	黒褐色			SB105j	
	SP111	ピット	C4	暗灰褐色			SB105k	
	SP112	ピット	B4	黒褐色			SB1051	
	SP113	ピット	B4	暗灰褐色			SB105m	
114	SP114	ピット	B1	暗灰褐色	土師器：胴部片・頸部片			―

第３表　遺構出土遺物一覧表

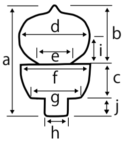
S番号	遺構番号	種別	地区	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期
116	SP116	ピット	B2	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
117	SP117	ピット	B2	明灰褐色	土師器：胴部　近世磁器：碗 口縁部（近世末）　土製品：土壁			近世
118	SP118	ピット	C2	黒褐色	弥生土器：壺 底部（中期）			弥生中期
119	SP119	ピット	B1	明灰褐色	土師器：破片　石製品：砥石			—
121	SP121	ピット	C1	明灰褐色	土師器：破片			古墳か
122	SP122	ピット	B2	明灰褐色	土師器：胴部片			古墳か
123	SP123	ピット	B2	明灰褐色	土師器：胴部片			古墳か
124	SP124	ピット	C2	暗灰褐色	土師器：甕（頸部・胴部片）			弥生末
126	SP126	ピット	C2	暗灰褐色	土師器：胴部（粗いケズリあり）			古墳
127	SP127	ピット	C2	暗灰褐色	弥生土器：甕 口縁部・甕 胴部（三角突帯あり）・壺（胴部片）			弥生中期
128	SP128	ピット	C2	暗灰褐色	弥生土器：甕 口縁部（刻目突帯 中期前半）　土師器：胴部			—
129	SP129	ピット	C2	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
131	SP131	ピット	C2	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
132	SP132	ピット	C1	黒褐色	土師器：胴部片・口縁部・頸部			—
133	SP133	ピット	C3	明灰褐色	土師器：底部片（平底）			弥生中期
134	SP134	ピット	C3	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
136	SP136	ピット	B3・C3	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
137	SP137	ピット	B3	黒褐色	土師器：坏 口縁部（古代）・胴部片			—
138	SP138	ピット	B3	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
139	SP139	ピット	A3	明灰褐色	土師器：胴部片			—
141	SP141	ピット	A3	明灰褐色	土師器：胴部片・破片（小型丸底か 5世紀代）			—
142	SP142	ピット	B3	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
143	SP143	ピット	C3	黒褐色	土師器：胴部片			—
144	SP144	ピット	C3	明灰褐色	弥生土器：甕 口縁部（刻目突帯 中期前半） 土師器：坏（口縁部）・皿C			16世紀後半
146	SP146	ピット	C3	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
147	SP147	ピット	C3	黒褐色	土師器：甕 口縁部（脚台付きの脚部か）			—
148	SP148	ピット	C4	黒褐色	土師器：甕（口縁部・胴部）・坏 口縁部（古代 9世紀代か）			—
149	SP149	ピット	B4	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
151	SP151	ピット	B4	黒褐色	土師器：胴部片			—
152	SP152	ピット	E5	暗灰褐色	土師器：胴部　土師質土器：鉢 口縁部（中世）			14～15世紀
153	SP153	ピット	E5	暗灰褐色	弥生土器：甕 底部			弥生後期
154	SP154	ピット	E5	明灰褐色	土師器：（胴部・頸部片）			—
156	SP156	ピット	F4	暗灰褐色	弥生土器：高坏 脚部（赤色顔料 中期）			弥生中期
157	SP157	ピット	F2	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
158	SP158	ピット	B3	暗灰褐色	国産陶器：唐津（碗）			近世
159	SP159	ピット	B5	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
161	SP161	ピット	K2	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
162	SP162	ピット	K3	黒褐色	土師器：甕 口縁部（企救型か）			—
163	SP163	ピット	K3	黒褐色	土師器：甕（頸部片）			—
164	SP164	ピット	H5	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
166	SP166	ピット	I3・4	暗灰褐色	土師器：甕（頸部）			古墳
167	SP167	ピット	I2	暗灰褐色	土師器：胴部片	167→030		—
169	SP169	ピット	H2	明灰褐色	土師器：坏 口縁部（古代）			古代
171	SP171	ピット	G4	明灰褐色	土師器（古代）：破片・胴部			古代
172	SP172	ピット	F5	黒褐色	土師器：胴部片			—
173	SK173	土坑	F5	黒褐色	弥生土器（中期）：甕（底部）			弥生中期
174	SP174	ピット	E5	暗灰褐色	土師器：胴部片			—
176	SP176	ピット	E4	明灰褐色	土師器：胴部片			—
177	SP177	ピット	E4	明灰褐色	土師器：胴部片			—
178	SP178	ピット	E3	明灰褐色	土師器：胴部片			—
179	SP179	ピット	D3	明灰褐色	土師器：胴部・頸部（突帯あり）			弥生中期
181	SP181	ピット	C3・D3	明灰褐色	土師器：胴部片			—
182	SP182	ピット	C1	暗茶褐色	弥生土器：胴部（赤色顔料）　土師器：胴部（突帯あり）・胸部片			—
183	SP183	ピット	B1	暗茶褐色	土師器：胴部片			—
184	SP184	ピット	C4	黒褐色	土師器：胴部片			—
186	SP186	ピット	D1	明灰褐色	土師器：胴部片			—
187	SP187	ピット	D1	暗灰褐色	弥生土器：胴部　土師器：胴部（突帯あり）			—
	調査区 西壁	3層	A4	暗茶褐色	P－1土師質土器：胴部片（近世）			—
	検出時	—	—	—	土師器：皿C・破片　弥生土器：甕（底部）　龍泉窯系青磁：連弁あり　国産陶器：備前（甕×壺）（突帯あり）			—

第４表　土器・陶磁器類観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)()は復元数値 口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)	色調・釉調	胎土	調整・装飾 内面	外面	備考	分類時期	R番号
第13図１	SB010	土師器	皿	(11.4)	2.3+α	－	－	(外)淡橙黄色 (内)淡橙黄色	細砂粒、赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ		皿C	001
第13図２	SB105	土師器	坏	－	1.5+α	－	－	(外)茶橙色 (内)淡橙色	角閃石、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ		坏A	001
第13図３	SB105	土師器	坏	－	2.8+α	－	－	(外)淡灰茶色 (内)灰茶褐色	石英、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ		坏A	001
第13図４	SB105	土師器	甕	－	1.6+α	－	－	(外)褐色 (内)淡褐色	白色粒子、石英	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ			001
第13図５	SA015	土師器	坏	－	1.8+α	－	－	(外)淡橙色 (内)淡褐色	石英、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ		坏A	001
第13図６	SA015	国産陶器	備前擂鉢	－	6.4+α	－	－	(外)赤褐色 (内)赤褐色	精良	回転ナデ	回転ナデ	交差状擂り目	中世6期	001
第13図８	SK045	弥生土器	甕	－	2.3+α	－	－	(外)灰黄色 (内)灰黄色	石英、長石、砂粒	ナデ	ナデ		弥生中期後半	001
第13図９	SK065	土師器	椀	－	1.1+α	－	－	(外)灰白色 (内)灰白色	細砂粒、3㎜×5㎜大の砂岩	ナデ	ナデ			001
第13図10	SK065	土師器	皿	－	2.3+α	－	－	(外)淡橙色 (内)淡橙色	雲母、石英、橙色粒子	回転ナデ	回転ナデ		皿C	002
第13図11	SK070	瓦類	平瓦	15.3	8.4	2.3	－	(外)灰褐色 (内)灰褐色	砂粒	布目痕	ナデ			001
第13図14	SK095	弥生土器	甕	－	2.5+α	－	－	(外)淡橙褐色 (内)淡橙黄色	角閃石、白色粒子、橙色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に黒斑	弥生中期後半	001
第13図15	SD075	青磁	碗	(20.8)	4.5+α	－	－	(釉)灰緑色 (胎)灰白色	精良	施釉	施釉		龍泉窯系	001
第13図16	SP009	青磁	坏	－	2.0+α	－	－	(外)灰黄色 (内)灰黄色	精良	施釉	施釉	輪花状	龍泉窯系	001
第13図18	SP019	弥生土器	甕	－	6.7+α	－	－	(外)にぶい黄橙色 (内)黄橙色	石英、長石、砂粒	ナデ	ナデ、タテハケ	押圧による刻目突帯		001
第13図19	SP029	土師器	坏	－	1.3+α	(8.0)	－	(外)橙褐色 (内)橙褐色	角閃石、長石、白色粒子	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ		坏A	001
第13図21	SP035	土師器	壺	(15.8)	12.2+α	－	－	(外)赤褐色 (内)赤褐色	角閃石、石英、白色粒子、砂粒	ナデ、ケズリ	ナデ		5世紀	001
第13図22	SP055	土師器	坏	13.3	3.5	8.5	－	(外)橙色 (内)橙色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ	底部回転ヘラ切り離し	坏A　9世紀	001
第13図23	SP056	土師器	甕	－	4.9+α	－	－	(外)灰茶褐色 (内)灰黄褐色	石英、長石、白色粒子	ナデ	ナデ			001
第13図24	SP074	弥生土器	甕	－	5.3+α	－	－	(外)淡褐色 (内)橙褐色	長石、角閃石、白色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ	外面にスス付着	弥生中期後半	001
第13図25	SP078	土師器	坏	(20.4)	1.8+α	－	－	(外)赤褐色 (内)淡茶褐色	角閃石、長石、白色粒子	ナデ	ミガキ	内・外面に赤色顔料 内・外面にスス付着		001
第13図26	SP084	土師器	椀	－	1.9+α	－	－	(外)淡黄橙色 (内)淡橙色	石英、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ	高台貼付痕あり 底部回転ヘラ切り離し		001
第13図27	SP089	弥生土器	甕	－	8.1+α	－	－	(外)茶褐色 (内)淡茶橙色	角閃石、石英、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ、ハケメ	刻目突帯2条		001
第13図28	SP093	弥生土器	二重口縁壺	－	2.4+α	－	－	(外)橙茶褐色 (内)淡褐色	角閃石、長石、赤色粒子	ナデ	ナデ	外面に鋸歯文	弥生後期	001
第13図29	SP117	土製品	壁土	4.8	5.3	4.0	－	(外)橙褐色 (内)淡褐色				骨材痕あり		001
第13図30	SP118	弥生土器	甕	－	8.5+α	(7.4)	－	(外)橙褐色 (内)淡褐色	長石、角閃石、白色粒子	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	外面に一部黒斑あり	弥生中期後半	001
第13図31	SP128	弥生土器	甕	－	3.9+α	－	－	(外)淡茶橙色 (内)淡茶褐色	細砂粒、白色粒子	ナデ	ナデ	刻目突帯2条		001
第13図32	SP137	土師器	坏	－	3.2+α	－	－	(外)灰白色 (内)灰白色	石英、細砂粒	ナデ	ナデ		坏A	001
第13図33	SP144	土師器	皿	(12.4)	1.9+α	－	－	(外)淡茶褐色 (内)淡黄褐色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	ナデ	外面にまばらに黒斑	皿C	001
第13図34	SP158	陶器	碗	(7.4)	2.4+α	－	－	(釉)黄灰色 (胎)淡茶灰色	精良			貫入細かい	唐津	001
第13図35	検出時	土師器	皿	(10.0)	2.0+α	－	－	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	精良、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		皿C	001
第13図36	検出時	国産陶器	備前	－	4.0+α	－	－	(外)赤褐色 (内)赤褐色	精良	回転ナデ	回転ナデ	三角形状突帯1条		002
第13図37	検出時	青磁	碗	－	(3.2)	－	－	(釉)緑灰色 (胎)黄灰色	精良、黒色粒子	施釉	施釉	鎬蓮弁文	龍泉窯系	003

第５表　石造物観察表

図版番号	遺構番号	種別	種類	法量(cm) a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	石材	備考	R番号
第13図7	SA050b	五輪塔	空風輪	22.4	8.8	8.1	14.2	12.2	14.1	12.6	7.5	6.8	5.2	凝灰岩		001
第13図12	SK085	五輪塔	空風輪	26.1	11.2	11.1	18.7	16.1	18.6	14.1	8.9	6.5	4.0	凝灰岩		001
第13図13	SK085	五輪塔	空風輪	17.5	9.7	9.7	16.3	12.8	16.5	12.3	5.5	7.3	2.9	凝灰岩		002



第６表　石製品観察表

図版番号	遺構番号	種別	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材	備考	R-番号
第13図20	SP034	砥石	8.2	4.5	1.9	115.0	砂岩		001

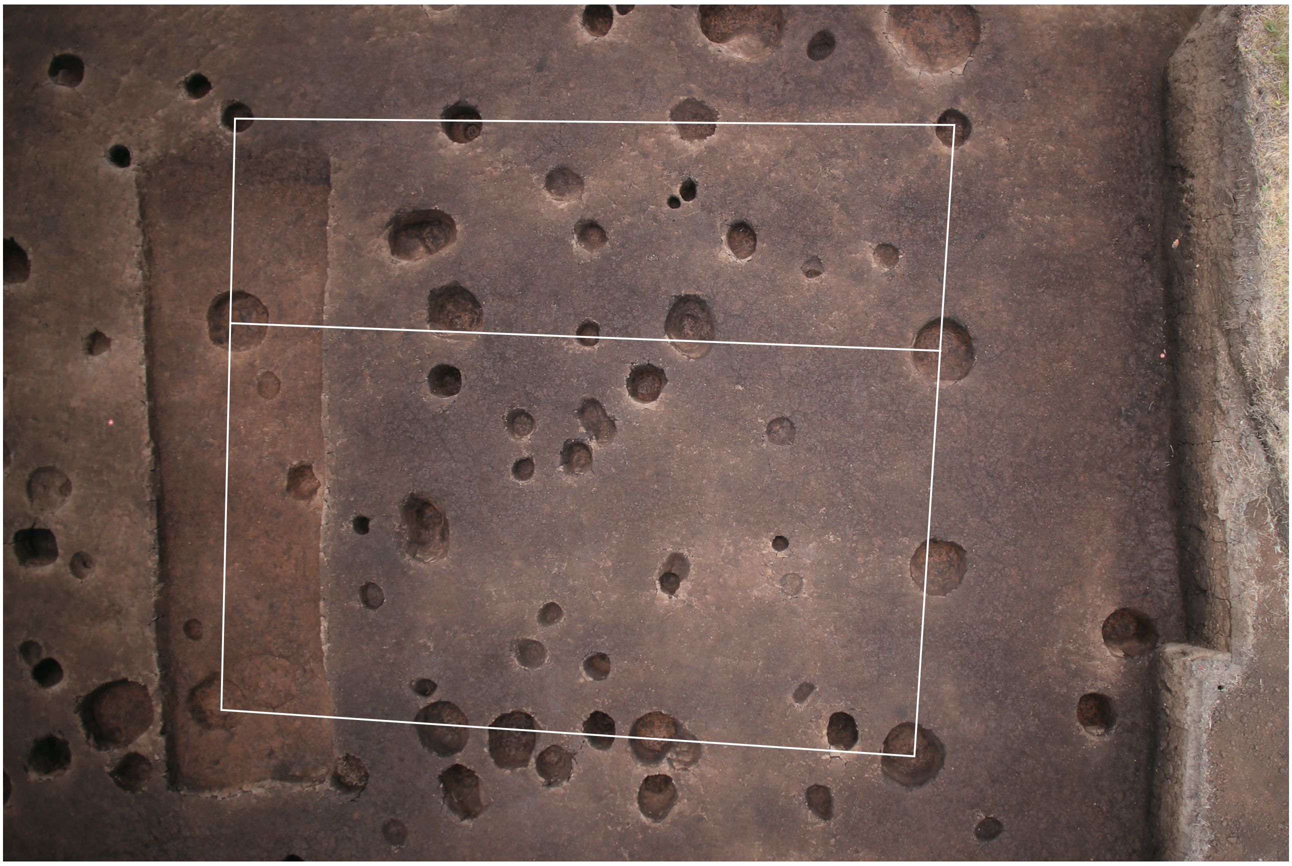
第７表　鉄製品観察表

図版番号	遺構番号	種類	法量 (cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考	R- 番号
第13図17	SP016	―	9.8	5.8	3.2	90.0	全面に錆び付着	001

調査地遠景（南から）

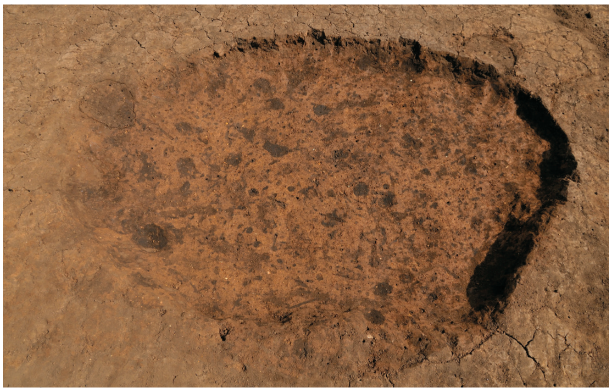
調査区全景（左が北）

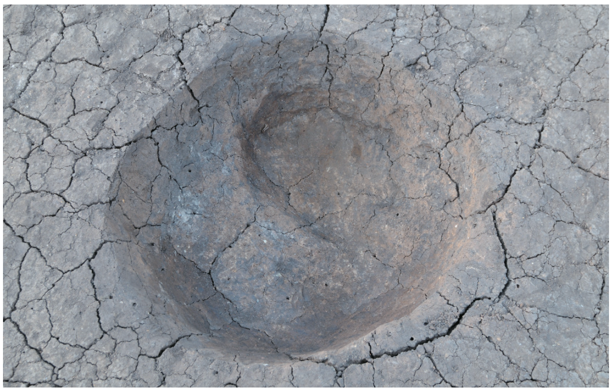
SB010・SA050 完掘状況（左が北）



SB105 完掘状況（左が北）

SA050b 遺物出土状況（南から）


SK020 完掘状況（南から）


SK045 完掘状況（北から）

SK065 完掘状況（西から）

SK070 完掘状況（西から）

SK095 礫出土状況（西から）

SP035 遺物出土状況（西から）

SP055 遺物出土状況（南西から）

第13図－1

第13図－6

第13図－7

第13図－11

第13図－12

第13図－13

第13図－16

第13図－17

第13図－18

第13図－20

第13図－21

第13図－22

第13図－23

第13図－27

第13図－29

第13図－30

第13図－35

第13図－37

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	いのいせき
書　　　　名	猪野遺跡３
副　書　名	第７次調査　－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第147集
編 著 者 名	小野綾夏　　永田裕久（有限会社九州文化財リサーチ）
編 集 機 関	大分市教育委員会
所　在　地	〒870-8504　大分市荷揚町２番31号　　TEL（097）534-6111　　FAX（097）536-0435
発 行 年 月 日	西暦2017年３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
いのいせき 猪野遺跡	おおいたしおおあざいの 大分市大字猪野	44201	201153	33°13′29″	131°40′8″	20160727～ 20160907	600	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
猪野遺跡第７次	集落	古墳・古代・中世	掘立柱建物跡・土坑・ピット・溝状遺構	京都系土師器・石塔（空風輪）・古墳時代～古代の土師器	掘立柱建物跡（中世）

要　約	
	調査地点である猪野遺跡は、大野川左岸に広がる標高40ｍの南北に延びた鶴崎台地上に位置する。これまでに周辺では6回の調査が行われており、縄文時代から中世までの長い期間に渡る遺跡が確認されている。近年では、調査地点の北西側で行った第6次調査において、弥生時代後期前半の銅矛埋納遺構が発見されている。今回の調査は、宅地造成の範囲である600㎡の面積を対象に調査を実施した。 調査の結果、大きく弥生時代から古代と中世の遺構及び遺物が確認できた。なかでも、庇を持つ掘立柱建物跡や、五輪塔の空風輪が出土する土坑等が検出し、これらの遺構から調査地点が当時の一般的集落とは異なった様相を示す場所であったことをうかがわせる。

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第147集

猪野遺跡３

第７次調査

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2017年3月17日

発行　大分市教育委員会

大分市荷揚町２-31